

▼ 多文化共生社会の構築シンポジウム「おもてなしの心を超えて」を開催

2020年1月26日(日)、日立シビックセンター(日立市)において、多文化共生社会の構築シンポジウム「おもてなしの心を超えて」を開催しました。

本シンポジウムは、昨年11月に開催した「日本社会における多文化共生社会の心の壁～心のグローバル化～」に続き、茨城県日立市で、「おもてなしの心を超えて」と題し、日本人のメンタリティからみた「心の壁」について追求しました。日立市、日立市教育委員会、公益財団法人茨城県国際交流協会の後援のもと、4言語の同時通訳をいれ、茨城県内から沢山の皆様にご参加いただきました。

基調講演は、前回に引き続き、女優・タレントとしてテレビやラジオなどで活躍されているイラン出身のタレントのサヘルローズ氏をお迎えしました。サヘル氏の質疑応答では、日系二世の方からの「サヘルさんは、つらい時は、どのように自分をコントロールしていたのですか?」の質問に対し「泣くことで発散していました。パーフェクトじゃなくていいです。自分の弱さを認めた時に、強くなれる。自分をもっとかわいがってあげてください。」とメッセージがありました。



女優・タレント:サヘルローズ氏



講演 1

「心の壁、言葉の壁、法の壁を考える」

アンジェロ・イシ氏
(武蔵大学 社会学部メディア社会学科 教授)



社会全体として、「古い形の国際交流」から「新しい形の多文化共生」にパラダイムシフトができていないです。そして脳内でも、その意識改革がまだ浸透していないのは、やはり心の壁の影響だと思います。つまり国際交流というのは、期限付きの短期の付き合いで、多文化共生は、無期限、エンドレスな付き合いを前提に色々な対応が必要になってきます。

講演 2

「心の壁と格差社会」

唐沢 穰氏
(名古屋大学 情報学研究科 教授)



「偏見はなぜ生まれるのか」という観点から、人間なら誰もが持っている心の働きである「認知的節約」が心の壁をつくる要因の一つになっている。そのなかでも、知識や理解の基本であるカテゴリー化と、目立つ事柄や思い出しやすい事柄は実際より多く起きているように感じやすいという原則を取り上げ、本来は私たちが効率的に情報処理を行うためのメカニズムが過度になると無意識による偏りを生む原因にもなります。

講演 3

「外国人の生活支援について」

鈴木 哲也氏
(公益財団法人茨城県国際交流協会 理事長)



外国人の生活支援について、茨城県内の在留外国人の状況と、公益財団法人茨城県国際交流協会の取り組みについてお話がありました。



茨城県国際交流協会のホームページ

日立財団は、多文化共生社会の構築の定義を、ダイバーシティとインクルージョンと合わせ包括的なテーマとして、2020年度も引き続き取り組んでまいります。

●詳しくは日立財団のウェブサイトをご覧ください。 <https://www.hitachi-zaidan.org/topics/topics071.html>

NewsLetter

Vol.36/2020.3

日立財団では、財団の活動情報を集めたニュースレターを発行しています。シンポジウム、セミナー、表彰式などの活動報告や、最新のトピックスなど、日立財団に関するさまざまなニュースをお届けいたします。ぜひご覧ください!

学術・科学技術の振興

▼ グローバルな社会課題解決力を担う研究者を支援

2019年度 第51回 倉田奨励金受領者決定

倉田奨励金は日立製作所第2代社長、倉田主税の提唱によって1967年(昭和42年)に創設された研究助成金です。

以来、自然科学・工学研究分野を対象として研究者を支えてきましたが、創設当時から大きく変化した高度な科学技術社会、その中で新しく生まれた社会課題への対応などを考慮し、今年度二つの見直しを行いました。

一つは、自然科学・工学研究部門においての2年間300万円の助成の追加です。将来有望で、継続的な支援が求められる研究を対象として、従来の1年間100万円程度の助成だけでなく、2年間の手厚い支援を始めました。二つめは、高度科学技術社会に通底する人文・社会科学研究部門の新設です。これは科学技術と社会を俯瞰的、構造的に捉える研究や、人間性、社会システムといった観点まで広げた研究などを対象としたもので、予想を上回る多くの応募がありました。



今年度の倉田奨励金は、これら二つを加えた自然科学・工学研究と、人文・社会科学研究の二つの部門で募集し、全国から計265件の応募をいただきました。選考委員会における厳正な審査を経て、44件の研究課題に対して奨励金を贈呈しました。

自然科学・工学研究部門

社会課題の解決に資する独創的・先駆的な研究への支援

今年度の自然科学・工学研究部門の応募は、これまでに増して多岐にわたっており、特に、環境、防災、情報技術や人工知能の研究、精神医学など、現代の社会が直面しているホットな研究フィールドへの応募が増えてきていると感じました。下記に紹介する採択テーマは、今回追加された2年間の支援を行う研究です。

新規の薬物依存治療法確立を目指したペプチドGPCRのアレスチンバイアスリガンド開発

東京大学 加藤 英明 准教授

覚せい剤やアルコール等の薬物依存症に対する安全性の高い治療法を確立することを目的とした研究。精神医療に関連する提案で、現代社会が抱える問題に対応するテーマ。

人文・社会科学研究部門

社会における、科学技術のあり方を考える研究への支援

新設の人文・社会科学研究部門への応募には、大きく分けて「倫理」「歴史」「法律」「実践的課題」といった四つの傾向が見られました。いずれもそれぞれの専門分野からの視点で高度科学技術社会を考える、大変興味深いテーマばかりです。ここでは、この四つの傾向から代表的な採択テーマを紹介します。



遺伝子ドライブの倫理的・法的・社会的課題に関する環境衛生倫理学的考察

神戸市看護大学 藤木 篤 准教授

遺伝子ドライブ=通常の遺伝の確率を越えて子孫に遺伝子が伝わるシステム。遺伝子ドライブを応用すれば、例えばマラリアを媒介する蚊を根絶するなど、人為的な操作により生物種を絶滅させることが可能。生物種全体を改変できるため問題視されているテクノロジーであり、本研究ではその倫理的・法的な考察を行う。

科学の世紀を支えた科学普及活動

—19世紀フランスにおけるルイ・フィギエの活動と現代における意義—

宇都宮大学 榎野 佳奈子 助教

鉄道・写真・電報など、科学の世紀と称された19世紀。当時の科学技術が専門家ではない一般市民の間でどのように共有されていったか?普及活動や不安や不信がいかに取り除かれていったか?などを解明する研究。

グローバル化とデジタル化がもたらす国際課税ルールの変容にみる市場、国家、市民社会の将来像に関する研究

京都大学大学院 諸富 徹 教授

グローバル化、デジタル化で台頭した多国籍企業は、国家主権=課税主権を揺るがす存在となっている。企業活動は国境を超えるのに対し、課税主権は国民国家の枠内に留められている。GAFAの問題等、従来の税の徴収ができなくなってきた今、将来における望ましい形を構想する研究。

工業高専での哲学対話によるシチズンシップ教育を目的とした学生ファシリテーターの養成

宇部工業高等専門学校 小川 泰治 講師

工業高専での「哲学対話」を活かした授業開発。高専の教育に对话力の向上を取り入れようとする試み。技術者と倫理教育、シチズンシップ教育の接続を試み、科学技術を担う専門家が、市民や異分野の技術者と対等なコミュニケーションを行うことができる土台を作る。

今年度採択された研究は、いずれの提案にも新しい視点で課題に取り組もうとする姿勢が表れており、今後の発展に期待しています。

倉田奨励金は、これまでに1,400名を超える研究者を支援してきましたが、これからも倉田主税が掲げた理念を継承しながら、変化する時代に相応しい活動を推進し、科学技術の発展と豊かな未来社会の創造に貢献していきたいと思えます。今年度の受領テーマの一覧は、財団ウェブサイトに掲載されておりますのでぜひご覧ください。また、研究要旨が掲載された冊子も用意しておりますので、ご希望の方は事務局までご連絡ください。

「日立財団アジアイノベーションアワード」創設!



科学技術イノベーションを通じた、アセアンの持続可能な社会の実現を目的に、SDGs達成に貢献する優れた研究及び研究開発の成果を表彰する「日立財団アジアイノベーションアワード」を開始します!

募集にあたっては、毎年対象となるSDGsのゴールと国を設定。2020年度は、ゴール2「飢餓をゼロに」とゴール3「すべての人に健康と福祉を」の達成に貢献する成果を募集します。国は、インドネシア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマーの6か国。対象大学及び研究機関に所属する研究者や学生が応募でき、応募者には自国或いはアセアンのあるべき社会像を描いたうえで、成果の社会実装計画も提出してもらいます。

募集期間は2020年4～6月。書類選考、遠隔面接後、10月に選考委員会を開催。最優秀賞の受賞者には、翌年1月に日本で開催予定の表彰式において、受賞内容をプレゼンテーションして頂きます。

募集期間は2020年4～6月。書類選考、遠隔面接後、10月に選考委員会を開催。最優秀賞の受賞者には、翌年1月に日本で開催予定の表彰式において、受賞内容をプレゼンテーションして頂きます。

- 最優秀賞 300万円(最大2件)
- 優秀賞 100万円(最大10件)
- 奨励賞 50万円程度(最大10件)

日立みらいイノベータープログラム

2019年度それぞれの学校で出張授業の最終回を迎えました

本プログラムは、これからの理工系人材に求められる資質「創造性、探求心、主体性、チャレンジ精神」と能力「問題発見・課題解決力」を“未来をイノベートする力”と定義し、この力の育成をめざして日立財団と日立グループが連携して実施している、小学校5年生向けの教育プログラムです。児童は専用教材を用いたスキルトレーニングを経て、その応用として「理想の学校づくり」をテーマに課題解決策の企画に挑戦します。

今回は、児童が前回の中間発表会でプレゼンテーションした「学校の課題解決策」について、日立グループ社員のアドバイスをヒントにさらなる情報収集や調査を行い、説得力をより高めた改善案を発表しました。本誌では、2019年度のプログラム実施校より、各1グループの発表を抜粋してご紹介します。

①テーマ:児童が考える「理想の学校」②課題:「理想の学校」を実現するための課題③解決策:課題に対する解決策④講評:日立グループ社員からの講評

2019年11月1日(金)

茨城県 日立市立河原子小学校



- ①綺麗な学校
- ②掃除用具が足りない場所がある
- ③(1)校内の掃除用具の「設置場所・数」を調査して、現状を把握する
(2)週に1度見回り、掃除用具が多い場所から少ない場所へと移動させる
- ④調査結果をまとめた表は、大変見やすく説得力のある資料で素晴らしい!私達大人もそうだが、実行に移すことが一番難しいので、一生懸命考えた解決策はぜひ実行してほしい。

2019年12月9日(月)

東京都 立川市立上砂川小学校



- ①みんなが楽しく過ごせて、不便がない学校
- ②男子更衣室がないため、
(1)男子が教室で着替えている間、女子は廊下で待たされてしまう
(2)女子が教室にいと男子が着替えられず、授業に遅れてしまう
- ③空き教室を整理整頓し、男子更衣室として使用する
- ④校長先生に一度は断られるも、空き教室に置いてある備品の種類・大きさを調査して、適切な整理整頓の方法を再度提案して許可を貰ったとのこと。アイデアの着眼点と諦めないマインドが素晴らしい!

2019年12月4日(水)

千葉県 柏市立松葉第一小学校



- ①昼休みを楽しめる学校
- ②給食の時間が押して、昼休みが少なくなってしまう
- ③(1)残った給食の再配膳に時間がかかるので、1人前の盛り付け量の目安を作って給食当番にアドバイスする
(2)お喋りで配膳が進まないの、うるさい人を注意する
- ④前回からの改善点として、調査対象を学年全クラスに広げて情報収集したのはすごい。解決策を試す中で新たな課題が見つかることもあるが、その都度グループで協力して取り組んでほしい。

2019年12月20日(金)

埼玉県 戸田市立新曾北小学校



- ①安全に楽しく過ごせる学校
- ②廊下を(1)右側通行しない人(2)走る人がいる
- ③(1)「右側通行できていない」ことを認識してもらうために、点字ブロックの突起をヒントに、(踏んでも怪我しないように)ダンボールで作った段差を廊下の中央線に貼る
(2)「夢は向かって走るもの ろう下は歩くもの」という標語を用い、走っている人の心に留まるポスターを掲示する
- ④アイデアは勿論のこと、活動の意図を伝える仕掛け(ポスター)が素晴らしい!今後は、段差とポスターの認知度向上をめざして活動してほしい。